

新任教授紹介

本号では、埼玉医科大学国際医療センター呼吸器内科の教授に新たにご就任された各務 博先生をご紹介します。



話し手●各務 博

埼玉医科大学国際医療センター呼吸器内科教授

聞き手●西條 長宏

公益社団法人日本臨床腫瘍学会事務局特別顧問

各務 博先生プロフィール

1988年新潟大学医学部卒業。1995年より米国クリーブランドクリニックへ留学。1998年新潟大学大学院医歯学総合研究科呼吸器内科学課程卒業。2005年新潟大学医歯学総合病院助手、2007年新潟大学大学院医歯学総合研究科呼吸器内科学助教、2010年同講師、2014年同准教授を経て、2015年11月より現職。専門分野は呼吸器内科学、腫瘍免疫学。日本内科学会認定医・総合内科専門医、日本呼吸器学会専門医・指導医・代議員、日本がん治療認定医機構認定医、ASCO full memberなど。



医師を志したきっかけと呼吸器科を専攻するまで

西條 本日は、埼玉医科大学国際医療センター呼吸器内科教授に就任された各務博先生に、これまでの研究や今後の抱負などを聞かせていただきます。まず先生のご経歴についてお伺いしたいと思います。出身地はどちらですか。

各務 新潟県にある加茂市という人口3万人ぐらいの小さな町です。

西條 医師になろうと思われた理由をお話してください。

各務 両親、親戚に医療関係の仕事をしている人はおらず、医師という、フェノール消毒の臭いがする遠い存在という感覚でした。高校の頃から、物事を理解してルールを解明するようなロジックのある学問に興味があり、数学や物理が好きでしたので、本当は素粒子物理学者か天文学者になりたいと思っていたのですが、低所得家庭だったこともありとても無理だと思いました。しかし医学であれば、病気を解明するということは興味深かったですし、経済的にも親孝行できるだろうと考えてこの道を選びました。ほかの先生方がおっしゃられるような高邁な理想があったわけではありません。

西條 新潟大学で呼吸器を専攻するきっかけは何だったのですか。

各務 医師を志した理由とほぼ同じですが、物事を考えていくのが好きだったので、内科系に入りたいと思っていました。そのなかでも、多くの患者さんを診て大勢の方の役に立ちたいと思い、患者数の多い循環器、呼吸器、消化器を考えました。当時、循環器は心臓カテーテル検査、消化

器は内視鏡検査といった手技が中心でしたが、呼吸器は多くの疾患が未解明であり“考えて解明する”ものが非常に多く、とても興味深そうだと感じ、呼吸器を専攻しました。また、このときに、鈴木榮一先生(現 新潟大学医歯学総合病院長)という尊敬できる先輩医師に出会えたこともこの選択を後押ししてくれました。



海外留学で得られた成果

西條 1995～1997年に米国のクリーブランドクリニックに留学されていますが、どういう目的で行かれたのですか。

各務 もともと呼吸器のなかでも“免疫”というシステムに興味をもっていました。免疫を勉強するのであればアレルギー疾患と考え、はじめは喘息を含んだびまん性肺疾患グループに入っていました。“免疫”を勉強するための留学をしたいと常々希望していたのですが、そんななか紹介されたのがなぜか“腫瘍免疫”のラボでした。その理由をあとで聞くと、その当時は誰も腫瘍免疫が肺がんに関係すると思っていなかったのか、肺がんグループの先生方がことごとく断っていたようです。しかし、実際行って勉強してみると腫瘍免疫も非常に面白かったです。

西條 当時の腫瘍免疫はどういう研究が行われていたのですか。

各務 私が行ったラボはSteven A. Rosenberg先生のお弟子さんがボスだったので、はじめは腫瘍浸潤リンパ球(TIL)を用いた養子免疫療法の実験を行っていました。実際に抗腫瘍免疫を担っている細胞はどれなのかを解明しよう命じられました。